



業務を最も深く理解しているユーザーによるシステム開発が理想型
内製化の推進が業務改善や標準化の契機になりました。

左から清水伸治取締役・渡辺秀一氏・石田雄大氏

システム内製化の取り組み推進により 開発期間とコストの大幅な圧縮を実現

株式会社ビームス 渡辺秀一氏、石田雄大氏 インタビュー

オリジナルおよび輸入品の衣料や雑貨を販売するビームス (BEAMS)。モノを通して文化を創るセレクトショップとして、国内外に有する店舗や E コマースサイトなどのチャネルを通じた商品・サービスの展開により、ライフスタイルを提案している。同社では、2015 年以來、ユニケージ開発手法をベースとしたシステムの内製化を推進。その取り組みの経緯や成果について、同社情報システム部に聞いた。

——システムの内製化に取り組んだ背景にはどのような課題がありましたか。

渡辺：従来当社では、Sler など外部のベンダーにシステム開発を全て委託していました。私達、

情報システム部門の役割はユーザーとしての要望を整理し、システムを開発してもらう際、システム化の目的や求める効果を正確に伝えることでした。課題として感じていたのが、わずかな要件の理解の差から開発されたシステムがイメージしていたものと異なってしまった場合や実際に使用後にあがる要望への対応というものが、追加の開発コストの発生になっていたことです。また、真に求める機能開発の完成までには時間と投資を繰り返し行わなければならないということでした。

このような課題を解決するには、要件を最も深く理解しているユーザー、つまり私達自身の手でシステム開発を行うことが理想ではないかと考えていました。

2 ヶ月間の研修期間を経て、半年でユニケージ開発基盤を構築

——ユニケージ開発手法を採用するに至った経緯についてお聞かせください。

渡辺：システム開発の内製化の事例を調べることはあったものの、具体的な検討や行動には至ってはいませんでした。しかし、2015 年 4 月のはじめ頃、USP 研究所と出会うきっかけがあり、ユニケージ開発手法の紹介を受けました。以前に参照していたシステム内製の事例のいくつかもユニケージ開発手法を採用したものであったことが話を聞いているうちにわかりました。その後、ユニケージ開発手法に興味を持ちはじめ

【図】内製化により構築したレポートシステムの画面例

「事業別月次売上検索 条件入力画面」



「事業別月次売上検索 結果画面」

これまで Excel によって人手により編集・作成されていた各種レポートの生成を、ユニケーj開発手法をベースにシステム化。ビームスでは、さらなる開発効率の向上を念頭に、画面の表示方法や検索条件などについて、各レポートシステム間での標準化も進めているところだ。

め、2 か月間の技術研修を経て、システム開発の内製化にチャレンジすることになりました。

私達は開発を委託する側であったため、当然、十分な開発スキルの知識も経験もありませんでしたが、2 か月の研修の中で学んだ内容でその後、開発することになるシステムの基礎を身に付けることができました。それは、一般的なプログラミング言語などに比べても、ユニケーj開発手法の習得のしやすさがあるのだと思います。

システム内製化への取り組みが業務の標準化への契機に

—内製化により取り組まれた具体的なプロジェクトについてご紹介ください。

渡辺: まずは、業務の現場で利用されている、レポート作成のシステム化を目標に着手することにしました。レポート作成は基幹システムから必要なデータを抽出し、独自で Excel を使用して帳票化していくため、業務が属人化しやすい傾向にありました。そういった潜在的な課題を捉え、業務担当者の帳票作成のプロセスをシステム化することを目指しました。

石田: その準備段階として、基幹システム上の必要なデータをユニケーjサーバー上に展開するという仕組みの構築に着手。

私達が講習を受けた直後の 2015 年 6 月から、USP 研究所のコンサルティングサービスによる支援を仰ぐかたちで取り組みを進め、10 月末頃までに完了させることができました。そして、翌 2016 年 2 月からは、私達の内製化による最初のアプリケーションとなる、店舗の予算・売上実績の月次レポートについての開発をスタート。2 か月程度の工期を経て、4 月には本番稼働の運びとなりました。

渡辺: 従来、業務がシステム化されていない部分を着手していましたので、マスタの作成やテーブルを定義していく過程は難儀でした。業務に合わせた考えを取り入れながらも、システムとして機能する為の設計を行いました。そういった作業は今まで培った要件整理やユーザー視点でのシステム開発の経験が特に活かされたと感じています。新システムの構築にあたっては、業務の標準化を進めることにも繋がりました。言い換えれば、ユニケーj開発手法を採用して内製化に取り組んだからこそ、業務改善を進める機会が得られたと言うことができます。

石田: その後も引き続き、それまで Excel により対応していた予算策定や事業部別の予算管理レポート、さらにはエリアマネージャが自ら担当する店舗の状況を把握するためのレポート作成など、システム化を順次進めてきました。経験を積み重ねていく中で、ユニケーj開発手法の優位性をより実感しています。例えば、10 数個のコマンドを駆使すれば、求めているデータの骨格が短期間で出来てしまうことや、WEB アプリを作る為のコマンドが最適に準備されていることで、生産性の向上を図れることは、ユニケーj開発手法ならではのメリットと感じています。



情報システム本部 課長 渡辺秀一氏



情報システム本部 情報システム部主任 石田雄大氏

業務の課題解消に向けて “頼られる” 情報システム部門へ

—ユニケーj開発手法によるシステムの内製化がもたらした成果についてお聞かせください。

渡辺: 内製化の実践が、システム開発を外部ベンダーに委託する場合に比べ、コストや工期の大幅な圧縮に繋がったことは言うまでもありません。重要なのは、これまで主にコスト的な観点から見送らざるを得なかった、システム化のニーズにも応えていけるようになったということです。そうした中で、社内のユーザーからも自分たちの抱える業務やビジネス上の課題解消に貢献するシステムの実現が、より身近になったという認識も広がりつつあります。その構築を担う情報システム部門に対する信頼感や期待も確実に大きくなってきていることを身をもって感じています。

—今後の取り組み予定について教えてください。

渡辺: 現状、私達の取り組みが社内でも認知されつつあり、システム化の要望が多く挙がるようになりました。それらの要望に対し、システム化への対応を着実にこなしていくこととなります。それと並行して、ユニケーj開発手法を使うことができる技術者のさらなる育成にも努めていきたいと考えます。その一方で、システム化の対応をする中、徐々に規模が大きくなってきています。ユニケーjで開発したシステムの安定稼働させるためにも運用・管理の強化も今後に向けた重要なテーマとなります。USP 研究所には、そうした面も含めて、さらなる支援、アドバイスを期待しています。



会社名: 株式会社ビームス

所在地: 東京都新宿区北新宿 4-16-12

資本金: 2000 万円

従業員数: 1,386 名 (2015 年 2 月時点)

ユニケーj開発手法に関するお問い合わせは

有限会社ユニバーサル・シェル・プログラミング研究所

東京都港区西新橋 3-4-2 SS ビル 3 階

TEL : 03-3432-1174 E-MAIL : koho@usp-lab.com

http://www.usp-lab.com